

第1学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「ねこと ねっこ」 教材名「ねこと ねっこ」

2 単元の目標

促音の表記、助詞の「を」の使い方、句点の打ち方を理解し、文の中で使うことができる。（〔知識及び技能〕(1)ウ）

語と語との続き方に注意することができる。（B(1)ウ）

促音の有無による音と意味の違いを、文の中で確かめる学習の中で、言葉への関心をもち、自分の取り組みを見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①促音の表記、助詞の「を」の使い方、句点の打ち方を理解し、文の中で使っている。（〔知識及び技能〕(1)ウ）	①「書くこと」において、語と語との続き方に注意している。（B(1)ウ）	①促音の有無による音と意味の違いを、文の中で確かめる学習に進んで取り組み、友達の反応や自分の記録を確かめながら、言葉の使い方や捉え方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

促音の有無による音と意味の違いを、文の中で確かめる。この教材では、促音の音と表記、語の意味を確かめた自作文を残し、言葉をどう使ったか、どう捉えたかが分かるようにする。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

独自例「きて・きって」を場面や動作で比べ、単に小さい字を丸で囲むだけにしない。想定する難しさは、促音を表す文字を落とす、音と表記を対応させずに写す。評価では、語と語との続き方に注意しているかを、促音の音と表記、語の意味を確かめた自作文と活動中の発言・操作から確かめる。作品の量や見た目、発言の回数だけで判断しない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○誰に何を伝えるかを確かめ、書く材料や最初の文を出す。 教師が選んだ既習語を声に出し、音の間と小さい文字を対応させる。	学習状況を見て支援する。
第2次	2 （本時）	○教師が選んだ既習語を声に出し、音の間と小さい文字を対応させる。その語を使った短い文を書き、助詞と句点も読み返す。読み手が受け取った意味を確かめ、自分の意図と違った箇所を選んで直す。残した表現にも理由をもつ。	思①（発言・活動中の記録・作成物）



6 本時の指導 (2/2)

(1) 本時の目標

語と語との続き方に注意することができる。(B(1)ウ)

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	誰に何を伝えるかを確認め、書く材料や最初の文を出す。 ○「小さい「っ」がある語とない語では、音はどう違いますか」 【めあて】促音の有無による音と意味の違いを、文の中で確かめる。 〈予想される児童の反応〉 ・小さい「っ」のところでは音を出さずに間がある。	最初の言い方や記録を残し、授業後の考えと比べられるようにする。正答を先に示さず、扱う言葉と課題を確認する。
展開 (分)	○「小さい「っ」がある語とない語では、音はどう違いますか」 教師が選んだ既習語を声に出し、音の間と小さい文字を対応させる。その語を使った短い文を書き、助詞と句点も読み返す。 読み手が受け取った意味を確認め、自分の意図と違った箇所を選んで直す。残した表現にも理由をもつ。 〈予想される児童の反応〉 ・小さい「っ」のところでは音を出さずに間がある。 ・文字の大きさも確かめたい。	独自例「きて・きって」を場面や動作で比べ、単に小さい字を丸で囲むだけにしない。 想定する難しさ：促音を表す文字を落とす、音と表記を対応させずに写す。 評価では、語と語との続き方に注意しているかを、促音の音と表記、語の意味を確かめた自作文と活動中の発言・操作から確かめる。作品の量や見た目、発言の回数だけで判断しない。 ◎思① 語と語との続き方に注意している。(発言・活動中の記録・作成物)
まとめ (分)	【まとめ】問いへの答えを、今日確かめた言葉や表現を含めて話す。 促音の音と表記、語の意味を確かめた自作文を見返し、初めと変わった点や、そのまま残した理由を確かめる。 〈予想される児童の反応〉 ・文字の大きさも確かめたい。	教師のまとめを写すだけにせず、本人が選んだ言葉と理由を確かめる。態度は本時だけで決めず、単元を通した取り組みと調整の記録を合わせて判断する。 ◎態① (最初と最後の記録、見直しの理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

縦書きで、右から左へ学習の流れを配置する。右端に題名とめあて、その左に問い「小さい「っ」がある語とない語では、音はどう違いますか」。中央は、促音の音と表記、語の意味を確かめた自作文に必要な言葉・材料と、考えた理由を対応させる。本文を扱う場合は先生が手元の教科書から必要な範囲を示す。左側に比べて気付いた点と見直した箇所、左端に本時で確かめたことを置く。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

